令和３年12月７日移動教育委員会・意見交換要旨（Ａグループ）

産学官民連携・キャリア教育について

（参加者１）私は、会社の人事・採用をやっている。その中で、昔の就職活動と内容が変わったと感じている。昔は、就職試験の際に専門的な業務内容について聞かれることはなかった。それよりも、バイタリティーや意欲の高さ等、体力や精神論について問われた。現在は、保護者も本人も会社情報を把握し、仕事の種類や何をやるのかという内容についての質問をしたり、就職活動の時点で、能力や環境についてお互いに確認しあったりするのが当たり前になってきた。私は、このような相互のやり取りが就職活動そのものだと思っている。高校１年生で文理選択時には、具体的な進路を決めていかなければならないと思うと、その時点で進路選択できるだけの情報を小中学生のうちから企業が与えなければならないのではないかと思う。これらの時期からいろいろな影響を与え、興味を持たせたい。企業でも社会体験の取組を提供していきたいと思っている。このような取組は、学校において需要があるか。

（神谷委員）中小企業の経営者は、商工会議所等を通じて学校に訪問し講話を行ったりしている。様々な職業の人がおり、人数も多いため、学校のニーズに応えやすいのではないか。例えば、中部小学校で商売の体験として、子供達と木の財布等を作り、チラシを作って街中で販売したことがあるが、社会勉強になったと思う。一方で、大企業は人を集めるにも限りがあるだろうし、難しい面もあるかもしれない。ただ、中小企業とはまた違ったものが提供できるのではないかと思う。

（参加者１）企業側からの提案ももちろん可能だが、制約事項は多いだろうと考える。自社のPRというレベルではなく、もっと大きな視点で浜松市の未来を担う子供達のために企業として協力していきたい。

（教育長）学校での需要はあるため、申し出を有難く思う。「市民協働による人づくり」の「市民」の中には会社も団体も含まれている。皆で浜松の子供を支えていきたい。モノづくりの街として、浜松のDNAを大切にしていきたい。そのためにも企業の強みを提供してもらい、子供達に伝えていきたい。子供はいろいろなことに興味を持っている。発達段階によっても興味関心が変わる。様々な企業の方が一緒になってやっていただけるなら有難い。教育委員会の浜松人づくりネットワークに登録していただければ、制約等について話し合いをしたり、マッチングをしたりして学校へ提供する。

（参加者２）小学・中学・高校生の娘３人を育てている。高校生の娘は、進路選択の段階にある。子供達は、親や先生以外の社会人と接する機会は少ない。しかし、学校だけでは仕事というものを意識する機会が圧倒的に少ない。将来の夢について考えたとき、好きなこと、例えば絵をかくことなどがあったとしても、仕事とつながるまでには至らない。本来仕事はたくさんある。中学生、高校生の子供に様々な社会人と接する機会を与え、自分の将来像を重ねられる機会をたくさん作ってあげたい。一つの企業だけでなく、連携しながら多種多様な企業の人たちと接することができれば、子供達の視野が広がると思う。

（教育長）いろいろな人との関わりの中で、憧れの人ができたりするので、直接話が聞けることは、とても大事なことである。今まで総合的な学習の時間で、様々な立場の方を呼び、話を聞いてきた。特に今年は、オリンピック・パラリンピックに関係のある方に来てもらった。相手も学校だからこそ喜んで来てくれる。このような取組みは、ぜひ今後も行っていきたい。また、コミュニティ・スクールでは、学校からのニーズを踏まえ、地元の人を中心に子供達と関わる機会を設けている。様々な方法で、様々な人に触れ合うことが、子供の将来に活きてくる。

（神谷委員）例えば、理数系の女性の先輩に関わる機会は少ないが、必要である。ある企業は、中学生、高校生の女性を対象に理系のセミナーを行っている。その他、静岡大学では、理学部、工学部に全国から元気な女性が多く集まっており、起業したい等前向きで活力のある子がいる。このような人達と触れ合える機会があるといい。

（教育長）学校単位で行うかは別として、興味関心がある人を集めて、市全体で取組めると良いと思う。

（参加者３）私は、コミュニティ・スクールの取組を素晴らしいと思っている。子供達は、社会に出て、すぐに開業するということはなかなかないと思う。まずは、郷土史や産業史を学ぶのが良いと考える。実感として、郷土や自分達のことを知っているのは大事なことである。学校では、フィールドワークをもっと取り入れてほしい。座学でなく、様々な企業の会社見学や、史跡巡りなど、１年に一回等、定期的に行うのはどうだろうか。国際的な企業が浜松にはいくつもある。このような都市は他にはない。見学の機会をぜひもっともってもらいたい。子供達は、必ず市内で就職するわけではない。海外に行く子もいれば、大阪、名古屋や東京などで働く子もいるだろう。出身地について、様々な紹介ができる子になってほしい。もう一つの提案は、学校でディベートやスピーチの授業を取り入れてほしい。日本人は、謙譲が美徳と考える人が多い。和を尊ぶのは良いが、今後海外で仕事をする機会も増えてくると思う。その際の日本人の課題は、ディベートとスピーチである。例えば、アメリカではディベートの授業がある。一つのテーマで賛成と反対に分かれ、意見を交わし、結論は出さない。また、韓国では小学生の頃からスピーチの教育をしている。子供同士で良いところ悪いところを評価しあう。日本もこのような教育をしていくべきではないだろうか。国際競争力をつけられるようなスキルを持たなければ、対等に渡り歩けない。

（黒柳委員）我が子は、中学生の時に地元の自分の足で通える職場に職場体験にいった。選択肢が少なく限られた職場ではあったが、子供なりにそこから職業に対する興味が広がっていった。職業の選択肢が広がればいいなと思う。郷土学習については、三方原の場合、社会科や総合の授業で開拓開墾について学んだりしている。子供達の中には地元に残って農業を行いたいという子もいる。各学校で地元にたいする愛着を育んでいる。今後も続けてほしい。

<u>学校における教科以外の学びについて</u>

（参加者４）学校は勉強を学ぶ場ではあるが、余暇の時間にもいろいろな学びがある。学校にお

ける教科以外の学びの必要性についてどのように考えるか。

（教育長）学校は、決められたことややるべきことをやらないといけないので、どうしても拘束されるところはある。余暇は、子供達が興味関心のあることを思う存分に学べ、すばらしいことだ。学校で学んできたことを余暇に活かすこともできる。自分の将来を形成する大事な時間であり、自分と向き合える貴重な時間である。余暇を通じて新たな興味関心が生まれ、学校の勉強にもつながり相乗効果も期待できる。余暇の過ごし方は昔よりも選択肢が多い。ゲームやスポーツなどいろいろな楽しみ方がある。体験や経験を通じて子供達には、様々なものに接してもらいたい。

（神谷委員）コロナ禍で学校内での過ごし方が変わってきていると思うため、授業以外の時間の過ごし方は多少制限されているかもしれない。

（教育長）子供は、学校では周りに合わせる姿が見られる。しかし、例えば余暇や放課後児童会などでは、素の自分が出せたりする。子供達がうまくバランスを保てることが大切である。

放課後児童会について

（参加者５）学校ごとにばらつきがあるが、自身の学区では全校生徒は約 600 人のうち、放課後児童会の受入人数は 130 から 140 人程度である。４年生が 10 人入れるかどうかくらいの状況である。他の学校は３年生でも入れない学校もあると聞くため、状況は良い方かもしれないが、もう少し受け入れられると良いと思う。民間委託に移行する中で、共働き家庭の増加に伴い、今後どのくらい規模を拡大する予定か。また今後、利用料が変わると聞いた。世帯年収が異なる家庭で、一律利用料が同じというのはいかがなものかと思うため、考えを伺いたい。

（学校・地域連携担当課長）放課後児童会は、旧浜松地域は地域の育成会がボランティアとして運営しているが、人材確保や場の提供などの課題があり、このままでは継続が難しい。民間事業者に委託することで、課題解決に努めていく。また、利用料は各家庭が適正な負担をしてもらうのがいいと考えている。

コロナ対策について

（参加者６）９月から学校が始まると聞いて、感染者数が多かったため不安を覚えた。新聞等で学校でのコロナ対策や抗原検査キットの配布等の記事は見たが、具体的な内容には触れられていなかった。今後第６波がくると言われる中で、学校は３学期開始に向けてどのように備えているか。

（健康安全課長）学校でのコロナ対策は、有識者に相談しながらマニュアルを作成し、随時見直しを行っている状況である。ホームページに掲載するためご覧頂きたい。学校には、会議や研修会等で周知をしている。また、非接触型体温計やアルコール消毒等の整備や、陽性者が出た際の濃厚接触者の特定等も保健所から助言をもらいながら行っている。今後も、最新の知見に基づいたマニュアルの改訂を随時行い、第６波に対応していく。また、インフルエンザの流行にも備え

ている。保護者の理解や協力を仰ぎながら、学校と教育委員会が連携して、子供達が安心して学校生活が送ることができるように対策していく。

（黒柳委員）私も９月に子供を通わせるのが正直不安だった。学校から情報を提供してもらい、安心できた。子供から、体育館に入るときに消毒液がなかったという話を聞いたことがある。部活動の最初と最後の手指消毒は大切だと思ったため、このようなことを保護者から要望してもいいのではないか。子供が安心して通える学校にすることが一番である。

（参加者６）濃厚接触者の定義が狭く、クラス内で感染者が出ても濃厚接触者がいないと言われることが不安である。誰でも受けたい人が検査を受けられるようにしてほしい。濃厚接触者の定義の見直しは検討しているか。

（健康安全課長）濃厚接触者の特定については、保健所の指導、助言に従っているため、引続き連携してしっかり行っていきたい。先ほどの話に出た、文科省が配布した抗原検査キットは各学校に配布した。抗原検査キットは教職員を対象にしたものであり、やむを得ない場合の使用を想定している。感染の疑いがある場合、基本的には教職員も医療機関へ行って検査をしてもらう。

（参加者７）中学生２児の母である。子供の様子を見て、学校現場で何が起こっているのかを目の当たりにしている。我が子は、西部中と中部学園に分かれて通っている。教育委員会からコロナ対策のマニュアルが出ていると言うが、２つの学校の対応は同じではなかった。学校によってやり方や考え方が違った。また、コロナ禍でコミュニケーションが希薄になった子供達がとても心配である。コロナ前は、授業でもいろいろな思いを表すことができ、楽しく学校生活を送っていたが、感染が拡大した昨年は、子供が小学校６年生で最上級生として、自分達から感染者を出してはいけないというプレッシャーや縦割り活動ができる１年生を迎える会、運動会など様々な行事が一方的に中止になり、非常に心理的な負担となった。給食や授業では、座席の配置が変わり、余分なことはしゃべってはいけないとされた。授業でも会話はなく、板書が主になった。このような状況下でも、前向きに捉えられる子もいたようだが、学校がつらい、やる気がなくなる子もでてきた。特に、下の子は「何のために学校に行くかわからなくなった」と言い、母親として子供の顔色を見て察しながら見守ってきた。一学期末の個人面談の際に、担任から心配の声があったため、コロナ禍における子供達の精神面に気遣って欲しいとお願いをした。二学期に入り学校は、子供達の残りの学校生活を少しでも充実できるよう、感染を防ぎながら、自分たちに何ができるかと子供達で決定できる場を提供してくれた。このような取組の中、学校全体で絆が生まれ、貴重な経験となった。行けないと思っていた修学旅行にも行けることになり、説明会が急遽行われるなどしたが、保護者も誰一人学校のせいにしなかった。６年の代表生徒が「先生方、お父さんお母さんに感謝して行かせていただきます。」と話したことが印象に残っている。今中学性に　なった子供達に、決断力や感謝の気持ちや絆が芽生えたことは良かったと思う。また、私は、医療現場で仕事をしているが、猛暑の中運動会の練習のためマスクを着用していたのが気になった。暑い時期にマスクをしながら運動するのはどうなのか。文科省からの指示かもしれないが、運動中のマスクについて考えてほしい。

（教育長）マスクの着用は文科省からの指示に浜松市も従っている状況である。走る際など運動時は、はずしても良いとなっており、体に負担をかけてまでマスクをする必要はない。学校によって認識の差があったようだ。また、昨年度の学校はコロナについて不透明な部分が多く、学校も難しい判断に迫られ、子供達に非常に負担をかけた。教育長として、自分も子供の精神面が心配だった。そこで、心の健康観察のアンケートを行ったが、子供達の精神面が見える化され、指導に活かすことができた。このアンケートは、教師にとってもとても頼りになったため、今年も行う予定である。今後も子供達の精神的なサポートはしっかり行っていく。本市はコロナを正しく恐れながら、修学旅行などできることややれることをなるべくそのままできるよう、取組んできた。行き先や宿泊先を工夫することで、保護者の理解を得ながら、子供のために何とかしてあげたいとの思いがこのような形となった。成果の一例として、段階的な学校再開は、不登校の児童にとっても負担軽減となり、登校できるようになった子もいた。厳しい状況下でも多くの貴重な教訓やノウハウが得られた。今後も、このような多くの知見を活かし、子供達の安全安心を確保し、今しかできない一生に一度の機会が奪われることのないよう、可能な限り取組んでいく。

教員免許更新制について

（参加者８）教員免許の更新制度は、2007 年 6 月に改正教育職員免許法が成立し、2009 年４月より導入された。当初から中教審のまとめでも、教育委員会の行う研修との重複、理論ばかりで役に立たない、形式的で学習効果につながらない、教育公務員の負担が大きい、教員不足の要因につながると危惧する声はあった。また、教育公務員の負担が生じ、教員不足の要因になっているとも指摘されてきた。一方で人工知能（ＡＩ）の発達を踏まえて、教育公務員が常に最新の知識・技能を学び続ける必要性は高まっていると強調している。廃止後は、１点目として教育委員会や校長らが教員の学びの状況を把握して研修の受講履歴を管理、２点目として教員と対話しながら適切な研修と奨励の場を作るように求められている。現状においても、指導力不足の教員への指導や再教育が必要と考えられている。現実的に教員免許更新講習の講習内容は、新学習指導要領の改定内容の説明が中心で、直接の指導力の向上にはつながるとは言えない。時間と費用の無駄とも思える。一方で、優秀教員は講習免除の特典が与えられている。教員に求められるのは、指導力だけであろうか。もっと重要なものがあると感じる。１点目は、道徳感・倫理観が欠如している教員が多いことである。この点の再教育が必要である。２点目は、接遇の勉強である。教員への接遇教育も保護者対応の視点から重要である。教員だけでなく、管理職においてもこの２点をふまえた研修が不可欠である。教育長の考えを聞かせていただきたい。

（教育長）本市は、更新講習について国に定めたカリキュラムに基づいて実施してきた。ただ、他の多くの自治体が、大学と連携して教員免許講習を実施する中、市独自の取組として、教育長の私自身が自ら講義を行い、浜松の教育について直接語ってきた。ご指摘のような課題もあり、発展的な解消の方向に進んでいることから、今後も国の動向に注視していく。ご指摘いただいた道徳感や倫理感の欠如は、ハラスメントや不祥事に直結する可能性があることから、教育委員会としても重視すべき点であると考えている。それ以前の問題として、子供達の前に立つ大人としてふさわしくないものである。教員採用試験では、人間性や倫理観を重視した面接試験を行っている。また、新規採用者には、初任者研修において、公務員倫理について周知徹底を図っている。管理職には、校長が一人一人の教員と行う人事面談や校内巡視等の中で不安や悩みを把握したり、

課題を早期発見するよう指導している。さらに、今年度から教育委員会の教職員課内に、不祥事根絶対策チームを設置した。全校長を対象に、自分の感情をコントロールできるようアンガーマネジメント研修を実施した。また、各学校の実情にあわせ、これまでに発生した不祥事を主な事例としてケースメソッドの研修を行った。接遇に関しても、地域に支えられた学校であるという自覚を持ち、丁寧でふさわしい対応ができるように、校内の倫理研修に盛り込むとともに、各学校に配付した電話対応マニュアルを活用するよう、必要に応じて指導をしていく。最後に、浜松市教育委員会は、今後も子供達の模範となる教職員として、より高い道徳感、倫理感、接遇の意識づけができるよう、学校への働きかけを行う。

令和３年 12 月７日移動教育委員会・意見交換要旨（Ｂグループ）

発達支援について

（参加者１）子供３人のうち、長男と次男が双子で 18 歳である。発達障害があるが、今年から社会人として一般就労し頑張っている。長男は小学生の頃、漢字を書くのが苦手で学校に行きたくないと言ったほどであった。病院にて相談したところ、病院の先生から漢字数を減らして、長男の負担を減らすようにと助言をしてくれたため、担任の先生に伝え漢字数を減らしてもらった。また、長男が小学４年生の頃、漢字を枠の中に書けず困ったときには、枠にとらわれないよう大学ノートに書くことを担任が提案してくれた。現在、三男が 10 歳で同じような表れがあり、三男が通う病院の先生からも同様の助言をもらい、担任の先生にお願いして文字数を減らしてもらった。ただ、担任の先生が教室で書き取り帳の丸付けしており、配慮が足りないように思う。他の児童が知った時に、ずるい等と責められ本人が傷つかないか心配だが、担任にこちらからここまで説明しないといけないのだろうか。長男の頃から８年も経っているのに、障害の理解へは進んでいても配慮の面では何も変わっていないように思える。特別扱いして欲しいわけではなく、できない子がいる場合、その子が周りの児童からどう見られるのかという事を先生にはよく考えてほしい。

（教育総合支援担当課長）本市において、発達支援教育と呼ぶようになって 10 年ほど経つ。一般的な言い方では、特別支援教育と言うのだが、あえて本市では発達支援という呼び方を意識して使っている。このように一人一人の子供の発達を支援するという浜松の教育については、多くの教員たちの理解は進んでいると認識しており、合理的な配慮の必要な子供への理解がないわけではないと思う。しかし、実際に目の前の子供がどういう状態にあるのか、何に困っているのかという気持ちを把握するのは、先生によって個人差が大きい。発達支援に関する知識はあるので、言えば気が付いてくれると思う。言いにくいようであれば、学校には必ず１人以上の発達支援コーディネーターがいるので、そちらに伝える方法もある。それでも言いにくい場合は、教育総合支援センターに相談してくだされば、対応する。お母さん一人で抱え込まないでほしい。

（田中委員）先生に「こうしてほしい。」と伝えていただくことが一番早い解決だと思う。また、先生の感受性によっても対応の仕方が変わってくる。同じできない子を見て、寄り添える先生もいれば画一的に接してしまう先生もいる。不登校も同じである。この感受性を高める研修が大事だと思う。インクルーシブ教育という子供の発達を支援するという教育的な考え方は、ここ 10 年くらいのものである。若手の先生の方が理解が進んでいるかもしれない。中堅以上の先生の中には十分な理解ができていない方もいるが、研修を進めている最中である。

（参加者２）書き取りは、できたところに〇が書かれるのか、間違ったところに×を付けられるのか。学校でやるのが嫌と言っているのか。

（参加者１）そうではなくて、書くこと自体が嫌ということ。まっさらな書き取り帳に文字を書くことが嫌なのだ。三男の担任は、保護者からわざわざお願いして減らしてもらわなければ気付いてくれない。長男の時は、担任が長男の様子に気付き減らしてくれた。長男は、発達支援学級

から普通学級にいったという経緯があり、一概に長男と三男を比べることはできないが、先生によって子供への支援に差があると感じている。

（田中委員）先生に言葉で伝える機会がなければ、連絡帳等にメモ書きでも良いので書いて伝えるのも良い。小学生なので、子供同士で傷つけることも言ってしまうこともあると思うため、保護者から学校へ事前に伝え、未然に防げるといい。

（参加者２）友達に見られて嫌なのかと思ったから、先生に花丸を書いてもらい、家でなおす方法もあるのかなと思った。

（参加者１）我が子は学校では頑張れるが、家でだらけてしまう。

（参加者２）うちの場合は、書き取りは、学校でやるので家ではやらなくて良いとしてもらっている。

（参加者３）我が子が通う幼稚園には、発達支援学級がある。３歳児健診で発達に障害が認められ、病院を紹介された。病院が幼稚園と連携しており、幼稚園を紹介してくれた。園の中で発達支援級が孤立しているわけではなく、教室の一つとしてある。子供が標準的な教育を受ける中で、自然な流れで、必要な部分だけ発達支援の教育を受けられるように整っている。例えば、普通学級で次にやることの予行練習をしてくれたりする。入園して、３年間が過ぎようとしているが、だんだんとコミュニケーションがとれるようになってきた。検査の結果も良くなっている。官民連携した支援で、我が子は恩恵を受けている。幼稚園でPTA会長として活動する中で、発達支援のある幼稚園とそうでない幼稚園のPTAでは、明白に意見が対立することがある。試行的な部分があるのかもしれないが、発達障害の子供は増えていると聞くので、浜松市には、率先して発達支援級を増やしていただきたい。

（幼児教育指導担当課長）市立幼稚園の発達支援教育について、とてもうれしい評価をいただいた。市立幼稚園は現在60園あり、うち６園に「発達支援の部屋」というものがある。それ以外の園にも支援の必要な子供がいるため、発達支援コーディネーターの役割を担っている職員が中心となって支援を行っている。また、支援の必要な幼児の数に応じて、職員を加配してきめ細やかな対応を行っている。発達支援の部屋は、すべての園に配置できることが理想ではあるが、職員の配置等で難しい面がある。特別支援学級として編成したものではなく、通常の保育の中で支援をする仕組みである。また、発達支援の部屋が設置されている園は、そこでの発達支援のノウハウを蓄積し、全園に広げていくことで、支援の底上げを図っていくという基幹的な役割も担っている。市立幼稚園に限らず、多くの就学前の子供が通う施設で、発達支援を必要としているたくさんの子供達がいる。そのような子供達への支援の底上げができるよう、民間施設に対する研修等の充実に向けて準備を進めている。また現在、発達支援の部屋は、様々な場所からの通園を考慮して、ドーナツ形に分散させて配置している。今後さらに、各園の取組を充実させ、全園の支援の充実、資質向上を行っていきたい。

不登校について

（参加者４）現在大学生の我が子は、中学時代に不登校だった。今年の３月に市内の中学生が自殺した事件に心を痛め、今回参加することを決めた。大切な子供が亡くなってしまった後に、学校や教育委員会、第三者委員会等が、いじめの有無について調べたとしても遅い。もっと前の段階で、いじめをみつけられないことがとても悔しい。我々はなぜ、いじめをみつけられないのだろうか。先生でも、いじめかどうか見極めるのは難しいかもしれない。たとえそうでも、例えば不登校など、子供に不調が現れた時にもっと手を差し伸べられることがあるのではないか。我が子のことにしても、もし、いじめが発覚した場合、本市はどのような対応をとるか知りたい。また、最悪の事態になる前の段階の対策をしっかりと立てていただきたい。そのような事態が起こらないよう、市としてどのような取組を行っているか知りたい。

（参加者５）我が子は、いじめや発達等が問題で不登校になったわけではなく、学校の先生が原因だった。どちらかと言えば、うちの子供は、先生の言うことをちゃんと聞き、先生に注意されたことを忠実に直していく子だった。その先生は、はじめから我が子を集中的に叱った。１学期の終わり頃、体育の授業の際に、先生に突き飛ばされたこともあった。１学期は頑張って学校へ通ったが、その苦しみや心の傷は、夏休みに体に現れ、大きな病院の検査で心理的なものと診断された。２学期が始まっても、言葉を発することもなく、長時間テレビを見るか、寝ているような状態だった。食事の量も少なく、一日一食くらいになった。自分は仕事をしていたため、気付くのが遅く、子供を一人にしたことを後悔している。私が仕事を辞めて家にいるようになり、だんだんと話ができるようになり、また笑うようになった。学校からは、その先生は校長に注意をされ、反省をしていると聞いたが、私はそのような姿を見ておらず、本当なのかと不審に思っている。また、先生たちが我が子を学校に来させようと躍起になっており、今はまだそのような状態ではないので、やめてほしいと言っても、やめてくれなかった。最近になって電話があり、なぜか急に寄り添う態度を示すようになった。教育委員会の担当者に、学校や校長への不信感を伝えた後くらいから、校長の態度も変わった。対応が変わった理由を知りたいくらいである。学校の先生との対立に時間を取られてしまっていたが、最近ようやく落ち着いて子供と向き合えるようになった。子供と保護者に対して、追い詰めるようなことをしていると学校に伝えても、なかなか理解してもらえなかった。子供の教育というより、先生の教育のほうが先なのではないだろうか。

（教育総合支援担当課長）先生は、子供の表情や日記、様子などを客観的に見て気付くべきではあるが限界がある。実際は、内面の変化に気付くのはなかなか難しい。そのために、コロナ禍における子供のメンタルヘルスの状態を知るために、こころの健康観察を行った。その中には、心の元気さが点数化できる項目があり、見た目には分からない、心の元気さの点数が低かった子供をみつけてフォローアップを行っている。このような取組は、昨年度と今年度に行っている。またいじめの調査は、なにかあればすぐに動けるよう、教育委員会で準備している。

（教育審議官）個々の事案についてしっかり把握をするような調査とは別に、いじめ対策専門家チームを外部の人を含めて作っており、３年に１回程度を目安に調査を行っている。個々の状態を把握するのではなく、市全体のいじめの概要をつかむため、専門家等の声を聞きながら、施策

や指導に活かそうとしている。本市では、過去に悲しい出来事があり、命の日を設定して忘れることのないよう向き合ってきた。いじめを根絶することが、非常に大切である。

（安田委員）私は、学校現場を離れて６年が経つ。今だから言えることだが、学校はオールマイティーではない。教員にも差がある。それをみなさんにも理解してもらいたいし、学校も先生も認めなければならない。だからといって、できなくて良いわけではない。むしろだからこそ勉強するし、努力をするし、知らないことは知ろうとする。そういう姿勢が大事だと思う。学校にはいろいろな教員がいて、当時の私は、どうしてこの人はこんなことが分からないのだろうと思っていた。もしかしたら相手も私に対して、そう思っていたかもしれない。しかし、俯瞰すると、そのように様々な人がいる集団が大事である。画一的な教員集団では、その教員集団に合う子は良いが、合わない子にとっては苦痛でしかない。私が、学級担任をしていた頃、学級経営で負けたくないから一生懸命やっていた。一方隣のクラスの先生は、スローペースだったため、そのやり方で大丈夫なのかと内心思っていた。しかしある生徒に「あの先生といると落ち着く。先生といると疲れる。」と言われ、頭を殴られたような気がした。子供を引っ張っていくだけが良いことではないのだ、子供の後ろをついていくような先生を望む子もいるのだと学んだ。先ほどの話を聞き、もしかしたら、合わない先生にあたってしまったのかなと思った。そのような場合に、管理職や学校を変えることはやろうと思えばできるが、あまりおすすめできる方法ではない。理解してくれる先生は必ずいると思うので、なんとかそのような先生とつながってほしい。学校にいなければ教育委員会を頼るのもよい。そして何よりも当事者である子供を中心に考えていくことが大事だと思う。また、以前に、不登校の担当をしたことがある。今はなくなってしまった国の施策だが、持ち授業は週 10 時間程度で、残りの時間は、不登校の生徒に対応するという内容だった。毎日、家庭訪問をしたり、学校内での居場所作りを行ったこともあった。しかし、学校に来ることが辛い子もおり、先生の臭いが嫌だから会いたくないという子もいた。そのような場合には、手紙や電話でその子に歩み寄れるものを探った。もっと昔は、数人の先生で柱にしがみついている生徒を無理矢理引っ張って学校へ連れていく時代もあったが、学校に来なければならないというようにはしなかった。今改めて考えると、様々な先生がいるので、この先生と話をして合わなければ、別の先生に接触してみてもいいのではないかと思う。いつでも最後に、この子にとってどうすることが良いことかというところに立ち返ってほしい。今はそっとしておいてほしければ、そう言えばいい。学校と敵対しても疲れるばかりでいいことはない。それよりも、理解してくれる人をみつけた方が良い。

（参加者５）スクールカウンセラーにも相談し、支援センターにも行き、今は学校を休む時期で、学校のことは考えなくていいと言われたが、学校の先生達は、電話でもいいから声を聞かせてなどと言い、接触を求めてきた。一か月も顔を見ていない、声が聞けていないのでと、子供の思いを考えずに、とにかく学校の都合で電話をしてきた。私は、子供の様子や機嫌を見ながら、慎重に接しており、その日のうちに、すぐに先生に答えができる状態ではないのに、そういった子供の心境を先生はあまり理解できていないようだった。

（安田委員）スクールカウンセラーは、子供と会ったか。スクールカウンセラーの判断は、お母さんの話を聞いての判断か。

（参加者５）はじめは、担任の先生が嫌だったが、小学校自体が嫌になってしまった。全部を拒否している。仲が良かった一人の子を除き一切連絡をとっていない。家の方が、子供は居心地がいいようだ。勉強はしたいが、授業にはいきたくないという感じである。

（安田委員）母親以外の血縁のない大人と関われるといいのだが。

（参加者５）学校とは関係のない支援センターの人ならいいと子供に言われ、子供も承諾して行ってみたが、その支援センターの人に、「この子はもう来ないと思う」と言われた。実際家に帰って聞いたら、子供も「もう行かない」と言い、それっきりになってしまった。それからは、どこにも相談に行っていない。

（安田委員）それは、適応指導教室に行ったのか。

（参加者５）発達相談支援センターに行った。発達に問題があるわけではないため、断られたのかなと感じた。

（安田委員）本市には適応指導教室があり、行きたいときにいつでも行っていいんだよ。いつでも受け入れる場所があるんだよ。と、子供には知らせてあげてほしい。

（参加者５）情報は与えたが、今は行きたくないようだ。

（参加者３）今は、SNS もあり、子供でも様々な情報とつながっているので、家にいても学校とつながってしまう。６歳の我が子でもタブレットを使っている。昔と違い、学校に行けないなら別の教室にいけば良いという解決方法ではなくなってきたのではないか。ICT を利用し、タブレットを使って授業を受けてはどうか。今は、子供が籠りながらどこかに助け舟を出せる方法を模索したほうがいい。私は、仕事で引きこもりの子供と会ったことがある。スマホをいじりたくない、外に出たくない、どこにも行きたくないという子だった。適応指導教室に行けばいいとわかっていても、子供には堅苦しく理解できないのではないか。

（安田委員）学校に配備されたタブレットは持ち帰って使えているのか。

（参加者５）一度だけ、接続テストとして 30 分の動画を見た。ドリル等を使うようにと言われたが、タブレットが全員分揃っておらず、すぐ返してくださいと言われた。今月中に揃うと聞いたがまだ連絡はない。このような学校に行けない子供達のために使うべきではないかというのは、学校に伝えた。

（参加者４）話を聞いていて共感する部分があった。我が子の不登校もきっかけは教師だった。父親の立場なので、当時はそこまで子供のことを見ておらず、後になって調べていったら、原因が教師だったと分かってきた。状況が悪化していた時に、弁護士に相談に行き説明したら、教師

によるいじめだと言われ、ショックだった。１年以上経過し、我が子もだいぶよくなっているため、触れないようにしているが、今も家族として解決しているわけではない。今話を聞いて、当時不登校になった我が子を思い出した。正直、こんな先生の授業だったら受けなくていい。学校なんか行かなくていいよと思った。結局我が子は通信制の高校行き、若干回復した。タブレットもそうだが、公立学校だからこそ、時代に合った形に進展させていくべきだと思う。先ほどの話は非常に共感するところがあった。私は、学校なんてやめちまえぐらいの思いでいる。気楽にはいかないけれど気楽に考えてほしい。

外国人支援について

（参加者６）私は外国人で、我が子は日本人である。昨年我が子が小学１年生になった。同じ教室に、全く日本語のわからないブラジル人の子がいた。私が通訳の仕事をしていることもあり、我が子も日本語とポルトガル語ができる。入学した初日に、我が子はその子の隣に座ってほしいと言われ、初日は、通訳しているんだよ。と喜んでいた。しかし、３日目になって、その子に暴言を吐かれたり、他の子にいろいろなことを言われたりするのが嫌だと言ったため、我が子は通訳ができるが学校には学びに行っているので、ブラジル人の子のサポートを任せないでほしいと伝えたところ、残りの１年間、先生にいびられ続けてしまった。例えば、我が子が何かできなかったときに、あの子はできなかったけど、みんなはどう思うかなどと名指しで取り上げられ、とても嫌な思いをしたと言って、家で泣いたことがあった。私は、そのような気持ちや様子を何度も学校に伝えたが、学校側の返事は、お母さんの思い違いではないかというものだった。また、子供が先生の言っていることをうまく理解できていないだけではないのかとも言われた。先生に注意ばかりされるので、我が子には友達の言ったことは聞かないで、先生が言ったことだけ従うように伝えた。ところが２年生になって、今度は新しい先生に「あなたのお子さんは、どうして友達と話をしないのか」と言われた。先生によって見方が変わり困惑している。先ほどの話から、学校のどこかには理解してくれる先生がいるだろうと期待しても、他の先生には、その子の情報が共有されていないのではないだろうか。また、先生同士で指導の仕方がおかしい等と言える体制はあるのだろうか。いくら理解してくれる先生がいたとしても、向こうから近づいてきてくれないと、私たちは知りようがない。先生同士が児童生徒の情報を共有したり、匿名でもいいから他の先生の指導方法や先生のいじめについて、訴えられるような仕組みはあるか。

（安田委員）小学校は、学級担任がだいたい全部を見ているケースが多いと思う。

（参加者６）通訳をしている関係で、小中学校や高校に行くことがある。外国人だから分からないだろうと、保護者に対しても軽く扱われていると感じることがあったが、今話を聞いていて、外国人に対してだけではないと思った。その時、担任の先生ではなく、上の人と話をさせてもらったが、その先生のやり方は少し違うとは思うが、その人のやり方なので、話してはみるが、どこまで解決できるか分からない。という返事で終わってしまった。今話を聞いていて、もし、このような話が皆に共有されているなら、自分だったらこうする、逆に、自分だったらしない等と気付く先生がいる気がするが、そのような体制になっているのか。

（教育審議官）小学校高学年では、来年度から教科担任制が始まり、大きな変革点を迎えている。

子供達を大勢で見よう、子供達が助けを求められる場所をたくさん作ろうという体制に変わりつつある。相談体制も含めて窓口をひろげていくことは大事だと思う。

教員志望について

（参加者７）不登校や発達障害について大学で学んではいるが、実際には自分が思っていたような体制ではなかった。いじめも傍観者も観衆者も許さないという雰囲気を作ろうといわれているが、実際の教室では難しいのかなと思った。対策や対応が自分にできるのか少し不安になった。

（参加者８）大学の授業では今日聞いたような実情までは深く教えてもらえない。このようなことも大学で学べるといいなと思った。

高校生等の交通意識について

（参加者２）自宅の横が高校生の通学路になっており、昔から高校生の嫌がらせが続き、ついに発達障害を持つ我が子がパニックを起こした。警察に相談し、対策をしてほしいといったが、なかなか動いてくれない。高校に伝えて対策してもらい一度は収まったが、最近、暗闇で大声を出すなどまたひどくなりつつある。警察からは、防犯カメラは道路側につけてはならないと言われたり、音声は撮ってはいけないと言われたり、解決しようがなくて困っている。人が困ることはしてはいけないということを小学生や中学生のうちから指導してほしい。他には、高校生や中学生の交通マナーが悪いのが気になる。私が運転していた時、一時停止の表示はないものの、たまたま停止したら、中高校生らしき２人が飛び出してきてびっくりしたことがある。もちろん学校でも交通マナーを教えてくれてくれてはいるとは思うのだが、将来とても心配である。また、学校で問題があった場合、例えば下駄箱でなにか問題が起きた場合、防犯カメラを設置してもらえるのか。

（教育審議官）防犯カメラの設置で安心する子もいるが、そのように捉える子だけではないため、とても慎重に判断しなければならない。

（安田委員）大学生の２人は今日は、とてもよい勉強をされたと思う。本当はインターンシップのような形で学生の間に学べるといいが、まずは教員になって、それから一つ一つ学んでいけばよい。ぜひ、がんばってほしい。